

はじめに [introduction]

東京蜘蛛談話会では年4回のクモ観察会を行っているが、そこで話題になることのひとつが簡易なクモ識別図鑑が欲しいということだった。新海栄一・高野伸二『クモ基本50』（1987年、森林書房）は版元が無くなって絶版・品切になってしまった。新たにクモを選定し直してクモ識別図鑑を作ろうという計画が浮上したのは数年前のことである。

基本種の選定を経て談話会会員の生態写真を募集し、過去の談話会会誌等の生態情報を盛り込んで、ここに『クモ基本60』を発刊する。

今回の作成にあたって念頭に置いたのは英国蜘蛛学会のウェブ・ページにあるクモ・データである。データに基づき成体雌雄の出現時期・发育段階・生息環境・採集法などが表示されている。

本書では過去14年間10ヶ所の関東地方での観察会のデータを基に記録率60%以上のクモから60種を基本種に選定した。ただし、屋内性など一部には記録率が低い種もある。生活史を示すグラフは観察会のデータを基に作成した。グラフの縦軸は観察会での成体記録の割合であり、9は九割という意味である。

基本種の隣には関連種を配置した。生態情報は『クモ基本50』の新海の解説のほか、主に池田ほか編『クモ生理生態事典』（2011年）に依った。網型・生息場所・繁殖習性（求愛・卵囊など）・令数等をデータのある限り記述した。成熟季節はオスの出現時期とピークを基本にした。秋は8月後半からとする等、

二十四節季を参考にした。出典の詳細情報はウェブ上の『クモ生理生態事典』にある。

和名および科名に関しては新海栄一『日本のクモ』（2006年、文一総合出版）に依拠した。学名はCD『日本のクモ』（2012年）を参照した。

身近なクモ30種をルーペで見ながら正しく知ることができれば、もっと詳しい図鑑や参考書を用いて自分で勉強できるようになる。そのためのきっかけが本書であって欲しい。珍種探しではなく、普通種の生きざまを知ることとSpider Life、クモのいる生活を楽しんで欲しいと思っている。

編集スタッフ

- 監修 -

新海 栄一

- 編集 -

池田 博明 仲條 竜太

初芝 伸吾 甲野 涼

- 写真 -

浅間 茂 新井 浩司 安藤 昭久

池田 博明 石田 岳士 腰高 直樹

荘司 康治郎 新海 栄一 谷川 明男

高橋 登 高野 伸二 千国 安之輔

初芝 伸吾 伴 満 水野 恵

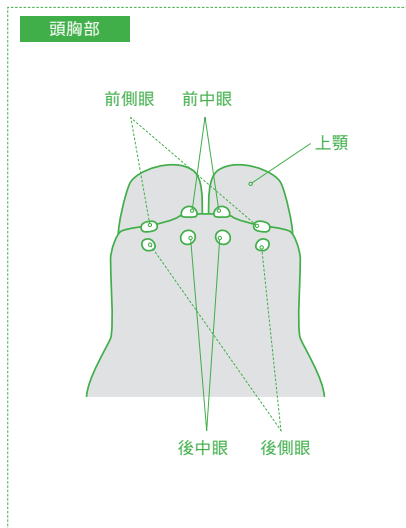
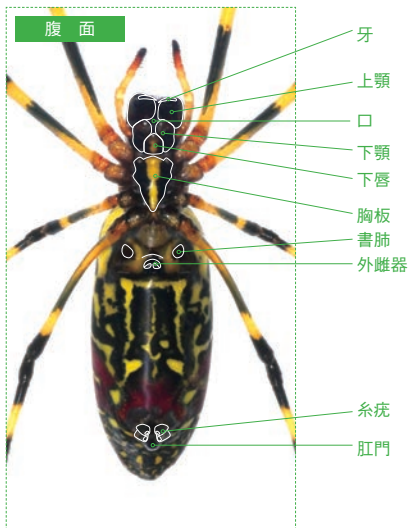
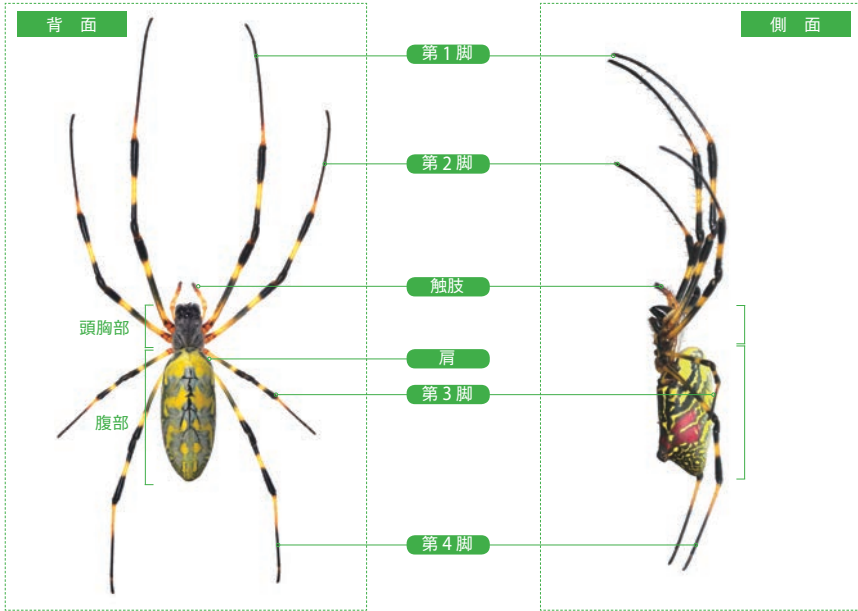
水野 碧 森田 剛則 山崎 茂幸

(1種の提供者は該当箇所にフルネームで記した)

- デザイン -

中 敦郎

体を表す用語



クモの生態や行動に関する用語と引用文献

円網の構造を指す用語は別図に記した。円網以外の網の糸を表す用語はそれぞれの種の解説で記した。

亜成体 成体になる直前の齡。

糸疣 いといば又はしゅうと読む。クモの腹部後端にある出糸器官で各一对の前疣・中疣・後疣から成る。糸疣上には吐糸管があり糸腺につながる。

外雌器 メスの交尾器官で、一对の交尾孔がある。成体ではキチン化して硬化したり色づいたりする。殻皮を通して内部の交尾管や受精嚢などが見える場合もある。

ガード オスがメスをそばで「守る」行動や母親が卵嚢を「守る」行動。徘徊性種の母親の多くは卵嚢の上でガードする。

交接 本書では「交尾」と表記している。

交尾 オスが触肢の移精針をメスの外雌器交尾孔に差し込むこと。以前は交接と呼んだ。

交尾栓 交尾後にメスの交尾孔をふさぐオスの道具。触肢の交尾器の移精針が取れて栓となる場合（コガネグモ科）やにかわ状物質を詰める場合（シロカネグモやクサグモ）がある。行わないクモも多い。

篩板 糸疣とは別にこまかい糸を出す出糸器官。篩板の有無は分類上重要である。

篩板糸 軸糸に丸いパフを作るこまかい糸。

出囊 クモの幼体が卵嚢から脱出すること。母親が卵嚢をかみ破って（開嚢して）出囊を助ける種類と幼体が自力で脱出する種類がある。

触肢 第1歩脚より前に付く付属肢で、オスでは交尾器官となり、精網上に生殖孔から出した精液を吸い上げて保持している。

成熟季 多くのクモでオスの成熟のほうが時期的にメスより早い求愛・交尾期も考慮した。ナミハグモはメスが先に成熟する。

性的二型 雌雄で色彩やサイズが異なること。クモでは一般にオスが小形。

成体 最終脱皮を終えて親になった状態。雌雄とも生殖器官が完成する。

精網 成体になったオスが作る小さな網で、触肢に精液を吸い上げるために使う。

梳系（そし） 本書では「篩板糸」と表記している。

体外消化 とらえた虫に口器の顎葉から唾液を、食道・吸胃に続く中腸から腸液をかけて口もとで消化し、溶かして吸い込む。

脱皮 成長に伴って体を囲む外殻を脱ぎ捨てること。

粘球 横系の軸糸に付けられた粘液が表面張力で丸くなったもの。餌捕獲に使用。

ふ化 卵から子グモが生まれること。

保育網 キシダグモ類の母親が出囊する子グモ用に作る網。子グモは保育網内でまどいをする。

まどい 出囊した幼体が一時的に作る集団。

幼体 成熟前の成長途上の子グモのこと。クモは不完全変態で、脱皮して成長する。脱皮ごとに齡数が増えていく。卵からふ化した子グモを1齡幼体とすると、一回目の脱皮を卵嚢内で行い、2齡幼体となって出囊、まどいを行う。二回目の脱皮を行って3齡幼体で分散するというクモが多い。ウツキコモリグモは卵嚢内で3齡幼体となってから出囊する（母親が開嚢して出囊可能）。出のう幼体を1齡とすべきだとする見解もある。

卵室 産卵のための住居。フクログモ類は葉を巻いて作る。ハエトリグモは卵室にこもって産卵するため卵嚢を作らず薄い糸で被うものが多い。

卵嚢 卵を糸で保護した袋。種により形や色彩が特異的。

【引用文献】

池田博明・桑田隆生・新海明（編），2011。「クモ生理生態事典」ウェブ上より。

小野展嗣（編），2009。「日本産クモ類」東海大学出版会。

新海栄一，2006。「日本のクモ」文一総合出版。

その後の事項は主に「東京蜘蛛談話会誌」Kishidaia および「東京クモゼミ報告」より。

1

19



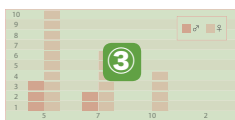


Photo: 森田



♂ Photo: 谷川

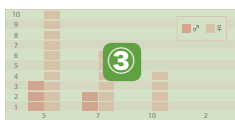
♀



♂ ♀

3

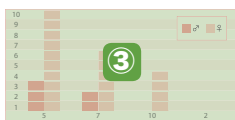
♀



♂ ♀

3

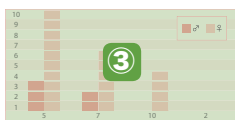
♀



♂ ♀

3

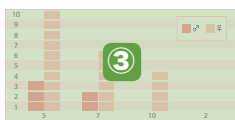
♀



♂ ♀

3

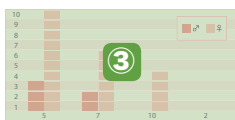
♀



♂ ♀

3

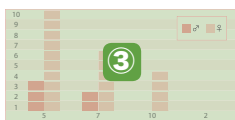
♀



♂ ♀

3

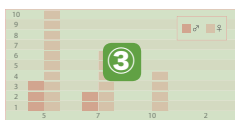
♀



♂ ♀

3

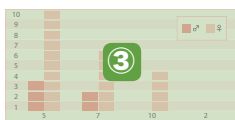
♀



♂ ♀

3

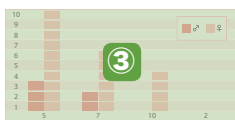
♀



♂ ♀

3

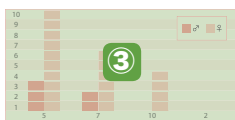
♀



♂ ♀

3

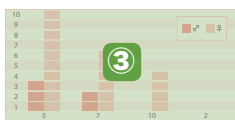
♀



♂ ♀

3

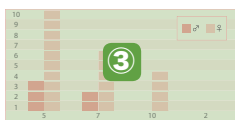
♀



♂ ♀

3

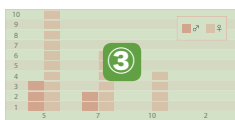
♀



♂ ♀

3

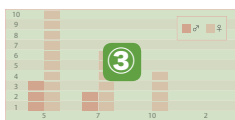
♀



♂ ♀

3

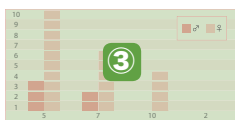
♀



♂ ♀

3

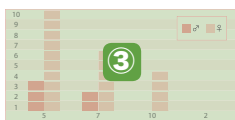
♀



♂ ♀

3

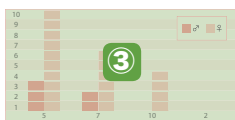
♀



♂ ♀

3

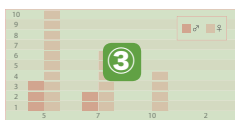
♀



♂ ♀

3

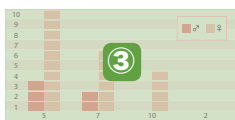
♀



♂ ♀

3

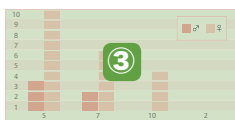
♀



♂ ♀

3

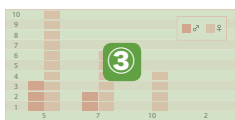
♀



♂ ♀

3

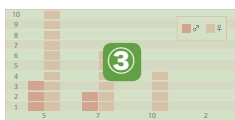
♀



♂ ♀

3

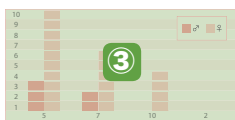
♀



♂ ♀

3

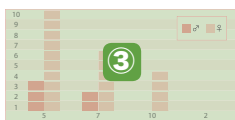
♀



♂ ♀

3

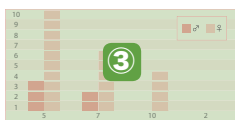
♀



♂ ♀

3

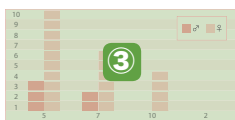
♀



♂ ♀

3

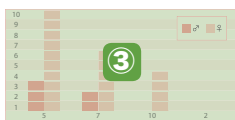
♀



♂ ♀

3

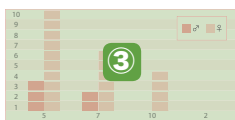
♀



♂ ♀

3

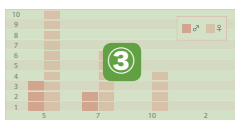
♀



♂ ♀

3

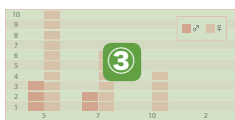
♀



♂ ♀

3

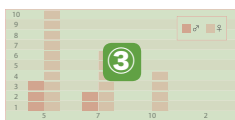
♀



♂ ♀

3

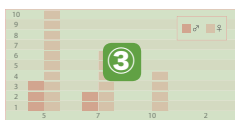
♀



♂ ♀

3

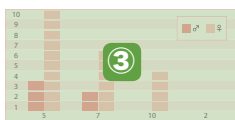
♀



♂ ♀

3

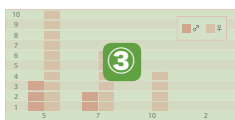
♀



♂ ♀

3

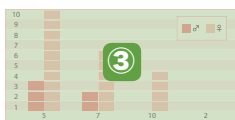
♀



♂ ♀

3

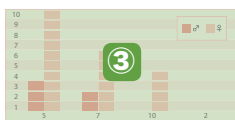
♀



♂ ♀

3

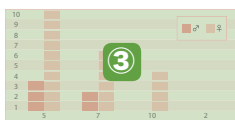
♀



♂ ♀

3

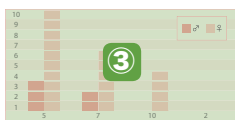
♀



♂ ♀

3

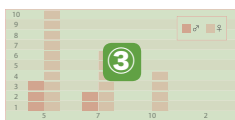
♀



♂ ♀

3

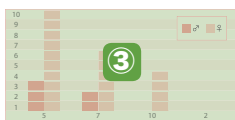
♀



♂ ♀

3

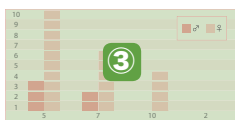
♀



♂ ♀

3

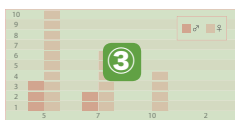
♀



♂ ♀

3

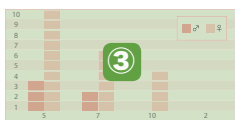
♀



♂ ♀

3

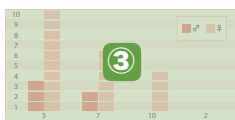
♀



♂ ♀

3

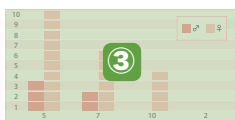
♀



♂ ♀

3

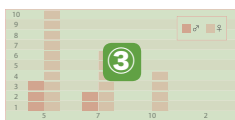
♀



♂ ♀

3

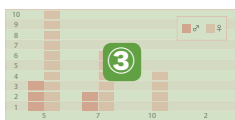
♀



♂ ♀

3

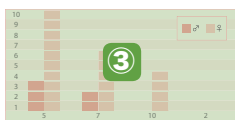
♀



♂ ♀

3

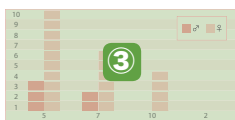
♀



♂ ♀

3

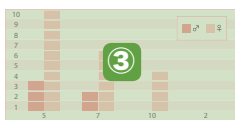
♀



♂ ♀

3

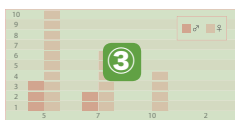
♀



♂ ♀

3

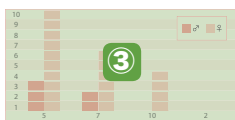
♀



♂ ♀

3

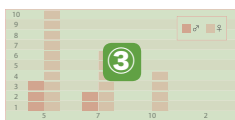
♀



♂ ♀

3

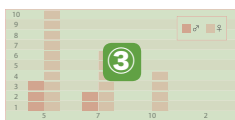
♀



♂ ♀

3

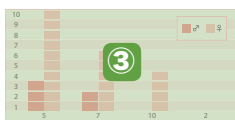
♀



♂ ♀

3

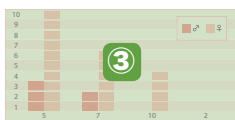
♀



♂ ♀

3

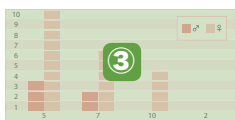
♀



♂ ♀

3

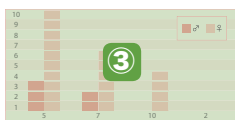
♀



♂ ♀

3

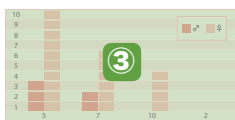
♀



♂ ♀

3

♀



♂ ♀

3



♀

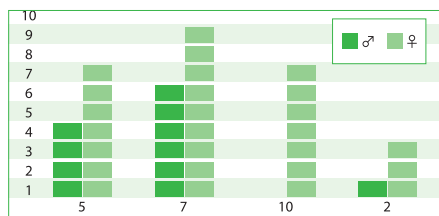
Photo: 池田

腹部は球形
色彩は多様
斑紋は類似種が多い



♂

Photo: 谷川



オオヒメグモ

大姫蛛 *Parasteatoda tepidariorum* (C.L.Koch 1841)

ヒメグモ科

100%



不規則網

成熟：春夏秋冬

♀ 約 5 ~ 8 mm

♂ 約 2 ~ 4 mm

【観察ポイント】 屋外でも人工物に造網していれば、オオヒメグモである場合が多い。樹間に造網する種はよく似た別種である可能性が高いので、識別には注意が必要。

【習性】 屋内性。**【網性】** 廊下の隅などに不規則網を張る。基盤に接する糸の端には微小な粘球が並ぶ。この粘球を「ガム・フット gum foot」、ガム・フットをもつ糸を「トラップ・スレッド trap thread」とよび、他の「支持糸 supporting thread」と区別する。中島晴子はヤモリがかかったのを観察している。

【卵囊】 淡褐色の球形で通常3~4個を網の

上部に作成、200~500卵、母親は新しい卵囊のそばにいる。

【トピック】 ガム・フットに触れた虫は端から切れたトラップ・スレッドに吊りあげられる。吊り上げられた虫は投げつけ粘球でラップしてから捕食される。この投げつけ粘球の糸部分は鞭状腺から、粘球部分は葉状腺で作られる。葉状腺は集合腺の進化したものだから、ヒメグモ類が持つ投げつけ粘球はオニグモ類の網の横糸に相当する仕組みである。



カグヤヒメグモ (成熟：春、夏)

Parasteatoda culicivora (Bös.& Str. 1906) ヒメグモ科

♀ 約 4 ~ 5 mm ♂ 約 2 ~ 3 mm

オオヒメグモよりも腹背の色彩は鮮やかであるが、オオヒメグモと見誤りやすい。正確な識別は生殖器に依る。千国 (1989) の図鑑のカグヤヒメグモは別種である。糸疣の周囲に黒環があるが、黒環はヒロハヒメグモにもあるので要注意。【網性】 建物の周囲ではなく公園や山麓の樹間に不規則網を造網。【卵囊】 長さ6~9mm, 幅4~7mmの球形, オオヒメグモより淡色で, 網内に通常2~3個吊るす。<♀ Photo: 森田>



ツリガネヒメグモ (成熟：春、夏)

Parasteatoda angulithorax (Bös.& Str. 1906) ヒメグモ科

♀ 約 2 ~ 4 mm ♂ 約 2 ~ 3 mm

黒い腹背の中央から後方に白いギザギザの横条がある。横条線はオオツリガネヒメグモにもあるが、オオツリガネはずっと体長が大きい。【網性】 不規則網の中央に砂粒を集めた釣鐘型住居を作る。同様の住居を作るヒザブトヒメグモやオオツリガネヒメグモとは、本種が小さいことから識別できる。【卵囊】 2~3mm長の桃黄色の卵囊を釣鐘住居内に置く。

<♀ Photo: 安藤>



オオツリガネヒメグモ (成熟：夏)

Parasteatoda tabulate (Levi 1980) ヒメグモ科

♀ 約 4 ~ 5 mm ♂ 約 3 ~ 4 mm

ツリガネヒメグモを大きくしたような紋様と形であり、腹背中央から後方に白いギザギザの横条線がはっきり見える。識別には生殖器の精査が必要。【網性】 不規則網の中央にツリガネヒメグモと同様の砂粒や枝片・草を集めた釣鐘型住居を作り、下方に伸ばしたトラップ・スレッドにはガム・フットを付ける。【卵囊】 山形県で7~8月頃、住居中で産卵する [吉田載]。

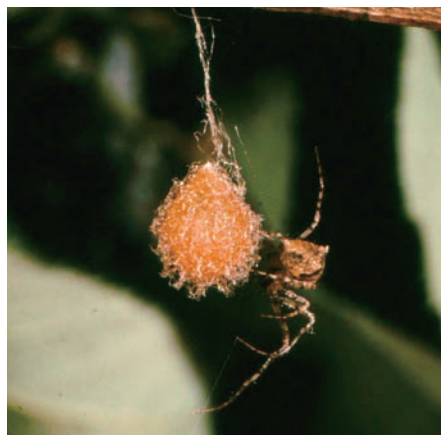
<♀ Photo: 谷川>



♀

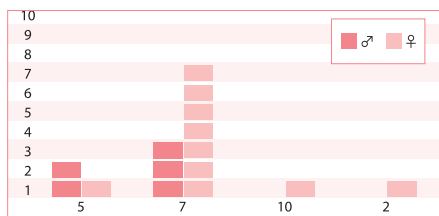
Photo: 森田

腹部は箱形で黒色の
点斑が全身にある



卵囊

Photo: 千国



センショウグモ

戦勝蛛 *Ero japonica* Bös.& Str. 1906

センショウグモ科

100%



成熟: 春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ~ 5 mm

♂ 約 3 mm

網へ侵入しクモ食い

【観察ポイント】 腹部は箱形で黒色の点斑が全身にある。クモ本体がいなくとも卵囊はよく見られる。

【習性】 他のクモの網に侵入し、その主を攻撃し、補食する。主に網を張るクモを襲う。ヒメグモ科、サラグモ科、コガネグモ科のクモがよく襲われる。クモの網に入ると、ゆっくりと網主に近づく。網主が気づいて向かってくると、前2脚を高く持ち上げ、相手の脚を防ぎながら、頭胸部の下面にまわりこんで、基節付近にかみつことが多い。ヒメグモ科のクモは投げつけ粘糸をか

けてくるが、粘糸が前脚にかかっても気にせず、突進して捕らえる。**【卵囊】** 5mm程の黄褐色の卵囊を雨の当たらない場所へ吊るす。産卵5月下旬~8月。20~35卵[新海]。

【トピック】 「戦勝」は岸田久吉による日露戦争の勝利に因む命名である。同様の戦勝祈願の命名には植村利夫による日中戦争勝利のカチドキナミハグモがある(1938年)。センショウグモの属名の「ero」はラテン語の「放浪者 erro」か「詰め籠 aero」の意味だろう。



ムナボシヒメグモ (成熟：春、夏)

Platnickina sterninotata (Bös.& Str.1906) ヒメグモ科

♀ 約 3 mm

♂ 約 3 mm

腹背に肩から始まるハート形の黒い紋様が見える。背甲中央にも黒い縦条がある。ハート形の黒紋の下方は左右に広がらずに中央で合わさりそうになっている (中図左)。生息市街地の森林の最優占種でかん木の間や葉上に生息、【網性】足場程度の網しか張らずに、クモ食いである。【生活史】オスは5月下旬から6月下旬、メスは6月下旬に多い。オスは8月下旬には見られない。産卵期6月、越冬態は幼体。<♀ Photo: 新海>



サトヒメグモ (成熟：春)

Platnickina mneon (Bös.& Str.1906) ヒメグモ科

♀ 約 2 ~ 4 mm

♂ 約 2 ~ 3 mm

腹背の肩からのハート型の模様は下側で左右に開いて「割れたハート」になっている (中図右)。ムナボシヒメグモと間違えやすい。【網性】足場程度の網しか張らずに、クモ食いである。【卵囊】白っぽい暗赤色で10月15日と12月1日に産卵された[熊田]。【トピック】クモ食いグモ同士を競わせた実験ではムナボシヒメグモが最強だった[加藤む]。

<♀ Photo: 新海>



ムナボシヒメグモ



サトヒメグモ



クロマルイソウロウグモ (成熟：夏)

Spheropistha melanosoma Yaginuma 1957 ヒメグモ科

♀ 約 3 mm

♂ 約 2 ~ 3 mm

捕食後に腹部は丸くなる。空腹時の腹部は細長い。【網性】足場程度の網しか張らずに、オオヒメグモやカグヤヒメグモ、ヒメグモの網に侵入し、網主や卵囊から出囊する子グモを食べつくす。ジョロウグモの網に居候した例も記録されている。【卵囊】高知県で7月、シロカネイソウロウグモの卵のうを少し大きくし、赤褐色にしたような卵のうを宿主の網に吊るす[中平]。【分布】南方種だが、北上しつつある。<♀ Photo: 谷川>



♀

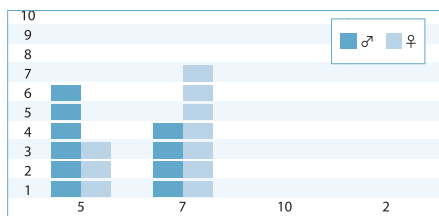
Photo: 森田

腹背の黒条は他のシロカネグモも同じ
肩の黒点部がこぶ状でない



チュウガタシロカネグモ♀

Photo: 石井



コシロカネグモ

小白銀蛛 *Leucauge subblanda* Bös. & Str. 1906

アシナガグモ科

90%



成熟: 春 夏 秋 冬

♀ 約 8 ~ 9 mm

♂ 約 5 ~ 7 mm

水平円網

【観察ポイント】 成熟時期がコシロカネグモは5月中旬, オオシロカネグモは6月下旬, チュウガタシロカネグモは4月と9月である。オスに二型がある。腹背の黒条は他のシロカネグモも同じである。

【習性】 オオシロカネグモよりも乾燥に強い。山地溪流にも見られる。**【網性】** 草間に水平円網を張る。丹沢では上限は標高610 m, オオシロカネグモの上限は570 mである。

【トピック】 属名はギリシア語で「白く光っている」という意味で, 種名はチュウガタ

シロカネグモ「blandaに似ている」という意味。刺激により黒い条斑は太くなる(他のシロカネグモも同様である)。これは刺激で皮下の銀色結晶を含むグアナノサイトが収縮して褐色の腸管が目立つためである。シロカネグモ類に限らず, クモの腹部の銀色の元はグアニン結晶である。グアニンは塩基で窒素排出物でもあり, 結晶は紫外線を反射する効果がある。



オスの二型

コシロカネグモのオスにはメス成体同型と、淡斑茶色の型（オオシロカネグモのオスに類似する）の二型がある。サイズの小さい個体に前者の型が、大きい個体に後者の型が多い。特に後者の型のオスはオオシロカネと見誤る例が多い。同日（5月29日）同所で採集したオス亜成体、メス型オス、オオシロ型オスを並べて示した〔池田〕。



チュウガタシロカネグモ（成熟：春、秋）

Leucauge blanda (L.Koch 1878) アシナガモ科

♀ 約 9 ~ 13 mm ♂ 約 6 ~ 10 mm

一対の肩の黒点がこぶの上にある。オオシロカネグモやコシロカネグモでは黒点はあってもこぶ状に盛り上がることはない。南方種であったが、1980年代以降、関東南部まで北上した。【生活】神奈川県小田原市では4月と9月に成熟する。比較的乾燥に強いようである。産卵後に卵がなくなっても腹部が縮小しないため、妊娠時期を長めに見誤る〔池田〕。

<♀ Photo：森田>



オオシロカネグモ（成熟：夏）

Leucauge celebesiana (Walckenaer 1842) アシナガモ科

♀ 約 11 ~ 15 mm ♂ 約 7 ~ 12 mm

オオシロカネグモの体長は通常10mm以上あるが、体長だけからコシロカネグモと識別するのは間違いのもとになる。越冬態は幼体で、地表近くのカンスゲ株の下方で越冬する〔加藤輝〕。メスの外雌器は左からオオシロカネ、チュウガタシロカネ、コシロカネである。

<♀ Photo：石田>



オオシロカネ

チュウガタシロカネ

コシロカネ



♀♂

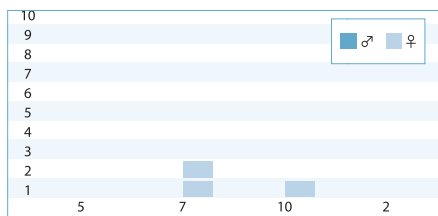
Photo: 新井

背甲が茶色で黒くない
腹背に白い領域がない



トリスノフンダマシ♀

Photo: 新井



オオトリスノフンダマシ

大偽鳥糞 *Cyrtarachne akirai* Tanikawa 2013

ナゲナワグモ科

70%



成熟: 春 夏 秋 冬

♀ 約 10 ~ 13 mm

♂ 約 2 ~ 7 mm

同心円状水平円網

【観察ポイント】 トリスノフンダマシ類が網を張ることがわかったのは1950年代で、夜間観察による。オスはメスに比べて大変に小さい。

【習性】 昼間は葉の裏に潜む。**【網性】** 湿度の高い夜6時頃から同心円状水平円網（厳密には同心円ではない）を張る。午前4時頃に破網し、丸めた網糸を食べる〔新海明〕。幼体は網を張らずに虫をつかみ取りて捕獲する〔熊田ら〕。湿度が低いと急速に粘球の粘着力が低下する。オニグモ類の粘球の粘着力の低下はトリスノフンダマシ類ほどではない。**【卵囊】** 黄

褐色の卵囊2~4個（最高7個）を作り、自分が潜む葉の近くにつるす。200~400卵（最大600）。求愛は7月末。秋に出囊〔新海〕。

【トピック】 類似種にトリスノフンダマシ *C. bufo* (Bos.&Str. 1906) がいて、背甲が黒褐色で腹背に白い領域がある。関東地方ではトリスノフンダマシは9月に成体、9月中旬に産卵、産卵後3週間をして出囊、ツバキの葉裏などで2令幼体で越冬する〔鈴木勝〕。



アカイトリノフンダマシ (成熟: 夏)
Cyrtarachne yunoharuensis Strand 1918 ナゲナワグモ科

♀ 約 5 ~ 7 mm ♂ 約 2 mm

生態はオオトリノフンダマシと同様である。【網性】同心円状水平円網で平均で縦糸 10 本、横糸 6 本、ワグ糸 4 本であった。横糸は交互に半円状に張られるが、その出発点となる縦糸は、必ず網の最下方のものが選択される。横糸に虫がかかると、一方の縦糸との接点が切れる構造になっている [新海明]。

<♀ Photo: 新井>



黒色型



ソメワケ型

アカイトリノフンダマシのソメワケ型

ソメワケトリノフンダマシという別種と思われていたが、アカイロの色彩変異であった。

<黒色型♀: 森田, ソメワケ型♀ Photo: 新井>



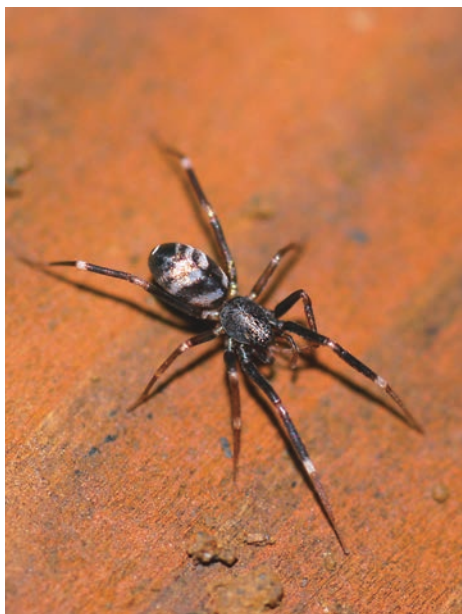
白帯型

シロオビトリノフンダマシ (成熟: 夏)
Cyrtarachne nagasakiensis Strand 1918 ナゲナワグモ科

♀ 約 5 ~ 8 mm ♂ 約 1 ~ 2 mm

腹背に横に白帯が入る型である。網形や生態は他のトリノフン類と等しい。求愛メスの 1 本の交尾糸上に置かれたオスは 2 秒ほど体を振動させた。メスは 1・2 脚で手招く。オスは接近し交尾後、交尾糸上に戻った。この行動を 4 度くり返した。交尾は 3 ~ 6 秒間だった (8 月 11 日)。8 月 12 日は 5 回交尾したが、13 日は雌雄ともに反応しなかった。8 月 14 日にメスは産卵、夜 5 回交尾。8 月 15 日 1 回交尾。8 月 24 日オス死亡 [泉]。また、クロトリノフンダマシとされていた個体はシロオビの色彩変異 (黒色型) だった。

<♀ Photo: 初芝>



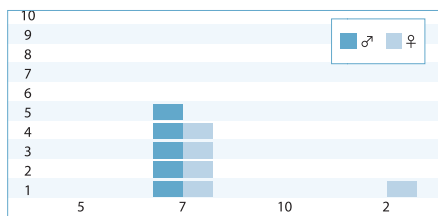
♀

Photo: 腰高



ヒゲナガツヤグモ♂

Photo: 初芝



ヤバネウラシマグモ

矢羽浦島蛛 *Phrulolithus pennatus* Yaginuma 1967

ネコグモ科

60%

落葉徘徊性



成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 3 ~ 5 mm

♂ 約 2.5 ~ 4 mm

【観察ポイント】 黒色の地色に金色の毛をもつ。腹背の矢羽根紋が目立つ。

【習性】 落葉層の表面を徘徊する。背面に金色の毛が輝く小形種。成体は6~8月に見られる。トビムシなどをよく捕食する。虫の方向に向き直りとびかかるが、取り逃がすことも多い。キロショウジョウバエ1頭を40~60分で食べる。食欲がない時はハエが脚の上を通っても取らない。脱皮の際にはドーム型の脱皮室を作る。脱皮には37~51分かかる。メスを探すオスは触肢を地面にたたくように震わせている。オス

はメスの後方から体によじ登る。交尾時間は左右合わせて2時間程。交尾済みのメスはオスから逃げた〔稲葉〕。産卵期は7月中旬~8月中旬。【卵嚢】2個以上、卵嚢長径は7~8mm、出嚢幼体数は5~8頭。越冬態は幼体。

【トピック】 落葉徘徊性の種類でヤバネウラシマグモとヒゲナガツヤグモ *Micaria dives* (Lucas 1846) ♀♂2~4mmは金色に輝く毛を持つ。ワシグモのなかにもフタホシテオノグモ (39頁) など金色の毛を持つ種類がある。



ウラシマグモ (成熟：春、夏)
Phrulolithus nipponicus Kishida 1914 ネコグモ科

♀ 約 3 ~ 4 mm ♂ 約 2 ~ 3 mm

乾燥に弱い。ヤバネウラシマグモより少し小さい。【卵囊】長径6.5~7.5mmを3~5個産卵，神奈川県平塚市で6月24日交尾，6月28日卵囊作成，7月2日二つ目の卵囊を作る。7月19日に最初の卵囊から1頭出囊し，7月21日3頭出囊した [杉崎]。出囊数は4~6頭 [稲葉]。産卵期は6~7月。越冬態は亜成体。

<♀ Photo : 谷川>



キレオビウラシマグモ (成熟：春、夏)
Phrulolithus coreanus Paik 1991 ネコグモ科

♀ 約 3 ~ 4 mm ♂ 約 2 ~ 3 mm

ウラシマグモよりやや小さい。平地から山地にかけて広く生息。樹林地，林道などの落葉の中，草間の地表，土壌のすき間，下草の葉上など，ウラシマグモと同所的に生息するが，成熟や産卵はウラシマグモより一週間早い。【卵囊】飼育下で卵囊長径6~7.5mmを3~5個産卵，出囊数3~4頭 [稲葉]。【生活】越冬態は亜成体。丹沢での上限は460m。

<♀ Photo : 谷川>



イナズマウラシマグモ (成熟：春、夏)
Phrulolithus claripes (Dön. & Str. 1906) ネコグモ科

♀ 約 3 ~ 4 mm ♂ 約 2 ~ 3 mm

ウラシマグモとほぼ同じ体長と斑紋 (図参照) だが，神奈川県箱根の大涌谷の個体群ではウラシマグモとは同所的に生息しない。関東では山地によく見られる [池田]。【生活】トビイロケアリの生活する地区に生活する。第1脚を振って歩く。夜間，アリを攻撃するようだ [小松]。本種とウラシマグモ，キレオビウラシマウモはきわめてよく似ているので，腹背の斑紋を図示した。

<♀ Photo : 谷川>



ウラシマグモ

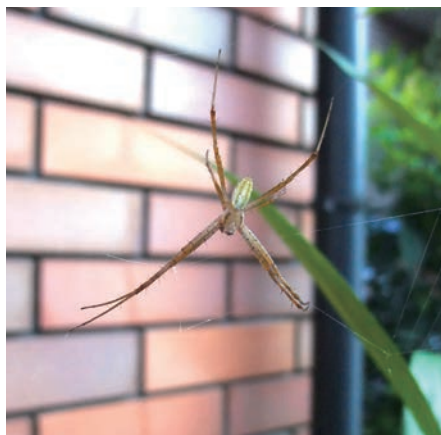
イナズマ

キレオビ



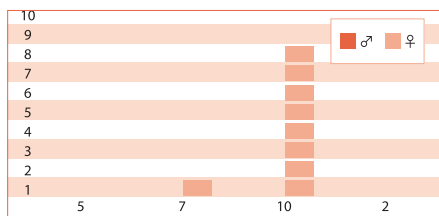
♀

Photo: 森田



♂

Photo: 水野



ナガコガネグモ

長黄金蛛 *Argiope bruennichii* (Scopoli 1772)

コガネグモ

100%

垂直円網



成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 20 ~ 25 mm

♂ 約 6 ~ 12 mm

【観察ポイント】 腹背の黄色と黒色の縞模様がコガネグモより多く、腹部がコガネグモより細長い。オスはメスより細い。刺激により網をはげしく前後にゆすり、黄色の鱗が収縮して一面に網目状を呈し、腹部正中斑および後端にある数本の縦斑が太くなる。

【習性】 河川草原によく造網するが生息域は平地から山地帯まで広く生息し、丹沢での上限は 1200 m (山地帯)。【網性】 草原や林縁の草間、水田の稲の間などに体のわりには小さな (直径 20 ~ 50cm) 垂直円網を張る。獲物はバッタ、ガ、ハエ、ヨコバイなどが多く、

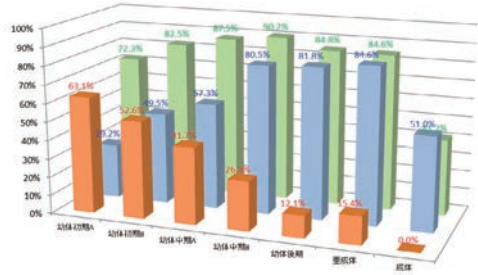
獲物がかかると捕帯で巻いてから中心に持ち帰って食べる [新海]。溪流上では網にハアリとアブラムシが高くかかり、ユスリカやカゲロウは低かった [吉田真]。かくれ帯の変化・後尾と産卵に関しては次頁参照。

【トピック】 ファーブル『昆虫記』でも詳しく観察されているヨーロッパと日本の共通種である。高知県ではコガネグモを牛若、本種を稲牛若と呼ぶ [中平清]



Photo: 水野

幼体と成熟



■ シート状のかくれ帯の比率
 ■ 帯状のかくれ帯の比率
 ■ ギザギザの丸のかくれ帯の比率

かくれ帯の変化: 水野

円網の中央にギザギザのかくれ帯を付ける。大抵はシート状を伴っている。出囊直後から帯状のかくれ帯があるが、発育が進むにつれてギザギザのかくれ帯よりも帯状のものを付けるようになる〔水野〕。6月初め出囊後にオスは6回、メスは7～8回脱皮をし、50～80日後の8～9月に成熟。オスはメスより10日ほど早く成熟しメス網に同居する。9～10月に4～6個のつぼ型卵囊を作る〔宮下和〕。



交尾と産卵

雌雄の同居期間はお盆頃で短い。オスはメスの最終脱皮直後に求愛するがメスに捕食される例がある〔吉田真〕。オスは交尾糸を作らずメスの網上で求愛し、交尾は数秒〔水野〕。ドイツの交尾実験ではオスの触肢先端は折れてメスの交尾孔に刺さった。求愛時間が長いと(平均307秒)、オスがメスに共食いされる率が56.3%に低下した。先オスの求愛を平均47秒で中断させると共食い率は76.5%。メスは成熟するとクエン酸から作った物質を性フェロモンとして放出するが、この物質は交尾すると放出されなくなる〔池田〕。産卵は夜間、卵囊作成には半日かかる。堺市で平均2.3個(最大6個)を作り、29～1363卵、1頭の子グモ数は平均650頭、孵化・脱皮しているが通常年内に成虫はしない。5～6月出囊後まどいをせず分散していく〔西野〕。

<♀♂同居及び卵囊 Photo: 水野>

